

転生ヒルチャール

芝神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

頭空っぽにして書いた

超不定期で更新するかも

目次

第1章

1. プロローグ	1
間の話	6
V S. 冒険者	10
V S デイルツク	20
間話 2	27

第1章

1. プロローグ

ヒルチャール。原神における雑魚モブ。

他にもヒルチャール暴徒、ヒルチャール王者、ヒルチャールシャーマンなどの種類があつたり、氷元素や火元素、雷元素を矢として射つてきたりする、けどそこまで強い敵。

そんな存在に、どうやら転生してしまったらしい。

溜息と共に自分を見る。色は茶色、髪なども色が変わっていたりはしない。つまり普通のヒルチャール。クソ雑魚モブ。

ここから強くなる事は出来るか？ 無理だろう。筋力を上げたり、武器を変えたり、

技術を磨いたりは出来るだろうが、シャーマンや暴徒のような姿にはなれない。

「どうすりゃいいんだよ」

「主？」「か？」「殺されて素材として仮面をとられ、操られてモンドに攻め入って、特に理由

も無く殺されるんだろう。

「殺さるのって、けど、人は殺したくない」

「????????????????」

「????????????????」

死ぬのは弱き者だけ。強き者は生き残る。生かすも殺すも強き者にしか選ぶ事はできない。なら、強くなるしかない。

「生きるためには足掻こうか」

「そーい、いや聞いたか、あの話」

「聞いた聞いた。黒い仮面のヒルチャールだろ？」

「あいつ、まだ生きてるらしいぜ」

「嘘だろ、ある程度強い冒険者が8人出張ったのにか？」

「なんでも、武器が壊れたり少し負傷しただけで、生かして返されたらしいぞ」

「マジかよ？」

モンドの鹿狩りにてそんな話がされていた。冒険者協会は黒仮面のヒルチャールを倒そうと躍起になっているようだが、未だに討伐報告は無い。

そして、それはなにも冒険者協会だけの話ではなかった。

「ー以上です」

「わかった。部隊の者には休暇を出す。英気を養うようにと伝えてくれ」

「わかりました！ 失礼しました」

ジンは騎士が出ていったのを確認した後、溜息をついた。

「おいおいどうした？ あのジンが溜息だなんて」

「ああ、ガイアか。なに、あの黒い仮面のヒルチャールの事だ」

「へえ？ ということはやはり？」

「そうだ。千岩軍との混成小隊は敗走。手傷を負わせることすら出来なかつたらそう
だ。逆に手心を加えられ、重傷者すら出ていない」

「ほう、それはそれは。強いとは思っていたが、そこまでとはな」

ガイアがニヤニヤと笑い、それを見たジンはもう一度溜息を吐く。

小隊、つまり30人が敗走。敵は巨大なわけでもなく、ただのヒルチャール。だから
こそ、その異様さが分かる。

「どうするんだ？ これ以上の人員を割くとなると、次は守りが手薄になる。なにかが
あるとするならば、見逃す事はないだろう」

「??? そうだな、3日後、私が出よう」

ガイアが少し目を見開き、そして笑う。

「ははっ、なら安心だな。モンドの事は任せてくれ」

「頼んだ。さて、それまでに仕事を片付けようか。不祥事が起こってしまったても困るか

らな」

「なあ、どうしたんだあいつ」

「知らないわよ。不確定要素の排除を命令されて以来ああなのよ」

2人の男女が見る先には、頬を赤く染めてブーツと座る雷萤術師がいた。普段なら頬杖ついて足をぶらぶらさせ、「退屈、退屈よ」と言っていたりするのだが、そんな様子もない。

「絶対何かあった」

「けどなんなのか分からないのよね」

「その命令で行った先で出会いがあったとか？」

「そんなのあるわけじゃないじゃない。そもそも、それなら彼女が排除するなりしてあんな事にならないわ」

「だよなー。一体どうしたんだあれは」

「すごいわね、まさかこれでダメだなんて」

群玉閣で報告書を見た凝光はそう言い、目を開く。

たかがヒルチャール、そう思っていた。だというのに、小隊を相手に殺さずに勝利し

ただ。

凝光は報告書を見ながら熟考し、従者に声をかける。

「今回の作戦に参加した者から更に詳しく聞き取りを。それと西風騎士の代理団長に連絡を」

「畏まりました」

「甘雨、いる？」

「はい、ここに」

「少ししたら出る事になるわ。ここをお願いね」

「ええ、わかりました」

「ふふ、楽しいことになりそうね」

問の話

電気水晶。原神に出てきた素材。

電気を含んだ晶石。雷元素の強化、もしくは耐性を付けるために使われることが多い。

「それだけしか使われてない。他に使い道があるはずなのに」

電気というのは、ほぼ全ての生き物に効く。原神の世界であってもそれは変わらないはず。効きづらいかどうか程度だ。

電気水晶を砕き、一粒5センチくらいにして、動物の皮で作った袋に放り込む。これを複数回やり、大きくなりすぎないくらいで袋の口を縛って床に置く。

採ってきた電気水晶はこれで全部砕けた。

砕いた電気水晶を入れた袋を持ち、拠点としている洞窟の中に入った。

拠点とした場所は璃月とモンドの中間にある洞窟だ。近くには滝があり、また、洞窟内にも滝と足元はほぼ水で浸かっている。

水はドラゴンスパイインから流れてきているのではと、洞窟内に住む氷スライムを見て

考えたりもしている。

洞窟の奥、水に浸からないように注意して掘った穴の中に入り、近くに置いてある鉄鉱石と銀鉱石の入った籠を持ち、炉の方へと寄る。

この世界にも鍛冶を行う場所があり、だが、鉄などの鉱石を溶かす溶鉱炉は見当たらなかった。鉱石の融解温度が低くなっているのか、それとも鍛冶屋にある炉で鉱石を溶かすことができるのか。

そんなことはさておき、木の棍棒や岩の棍棒では簡単に破壊されてしまう。だからこそ鉄を自分で加工する必要があった。

「試行錯誤してこんなのできましたってな。お前もありがとな。手伝ってくれて。ここからが本番だ。頼むぞ」

炉の中で燃える火スライムに声をかけ、路の中に鉱石を放り込んだ後、火のトリックフラワーから集めた蜜をスライムに与える。

ゆっくりと上がる温度。ある程度温度が上がったら爆炎樹の葉を入れて蓋をして泥で隙間を埋める。

少しして炉の周囲が暑くなってきたのを感じ、雷水晶の入った袋を手を持ちその場から離れ、炉を見る。

モワリと陽炎が炉の姿を歪ませ、ジリジリとした熱が横穴を抜けた場所まで来ていた。相変わらずクソ熱い。ただ、このくらいじゃないと融けないから仕方ない。

水スライムのピュレを体全体に塗り、陽炎立ちこめる横穴へと進む。ジリジリとピュレが消えていく。やはりというか気休めにしかならない。

奥にたどり着くと、溶けて流れ出てきた鉄を水に浸けていた木の棍棒にかける。

一瞬で蒸発する水によって爆発が起き、ピュレによる装甲が弾け飛んだ。熱が肌を、肺を焼く。

だが、目を閉じず、棍棒から手を離さない。

棍棒をゆつくりと回して満遍なくかけ、確認が終わつてすぐに横穴の外、水の中へ飛び込んだ。

「あつあああああきもちいいー」

手元からジュウウウウと音が聞こえるが無視。今だけは無理。熱すぎんだよむしろよく近づいたな俺無謀すぎるわ。もつと改良しないと。

ただ、これで武器の元となる物は作れた。だから今はいい。

「あとはこの鉄棒を抜き取って、焼き入れと焼き戻し、電気水晶を嵌めれる穴を開け、同じ位置に穴を開けた棍棒に鉄棒を被せ、固定する。道のりは長いから頑張らないとな」

今はまだ生きれている。他のヒルチャール達に手合わせしてもらったり、1人だけの冒険者に襲われて返り討ちにしたたり。

もつと、もつと。力を。人を殺さずに済むほどの力を。武器を。防具を。俺は強くならなければならぬ。殺さないために。殺されないために

「??一眠りしたら腹ごしらえして鉱石集めだ。食料も心許ない。がん、ばる、かー」
こうして俺は眠りについた。

そして起きた後に探索に行き、アンバーに尾行されていたのに気が付いた。

ああ、本当に、嫌になる。道具を早く作らねば

V S. 冒険者

なんでこんな依頼が回ってきたのだろうか。

冒険者協会に所属する俺たちは、一様にそう思っていた。依頼内容は特殊なヒルチャール一体の調査、もしくは討伐。それだけ。

「俺ら騙されてんじやねえのか？ たかがヒルチャールだぜ？ シャーマンや暴徒、ましてや王ですらないしな」

「集落を対象とした依頼ならともかく、こいつだけだからな。そう思うのも仕方ないが、少し気合を入れる。冒険者協会は、集落一つ分と同じくらいの金を出すんだぞ。油断すれば命取りになる」

はいはい分かった分かったと皆が返事し、リーダーはため息を吐き依頼内容をもう一度見る。

指名依頼

特殊なヒルチャールの調査・討伐

本来ならば群れをなすヒルチャールが、何故か一体だけで行動しているらしい。

新人冒険者を複数回、中堅冒険者を一人無力化するほどの実力を持つ。可能ならば討伐、逃げられたとしても情報だけでも持ち帰ってもらいたい。

本当に、これだけなのか。実は集落が近くにあつて、この一体以外にもいるのではないかと思つてしまう。

疑問は尽きない。だが、指名までされたのだ。こなしで見せようじゃないか。

「準備は出来たか？」

「おけつす」「オツケー」「張り切つて行きましょー！」「力が漲つてるのだ！」「ふむ、つまりは元氣ビンビンということだな」「おいバカ下ネタやめ」「次に下ネタを言えばソレを切り落としますわよ？」「すみませんごめんなさいそれだけはご勘弁を」「あーあー言わんこつちやない」

「ヨシツ、体調も調子も良さそうだな。行こうか」

モンド城を出発しアカツキワイナリーの横を抜け、璃月とモンドの間。穏やかな川が流れ、璃月とモンドの特産品が生える、どちらの土地とも言い難い場所。偵察騎士からの情報では、この辺りに住処を作っていると思われる、らしい

「やっぱさあ、普段より情報が少なくてねえか？」

「それがな、偵察騎士ももつと情報を集めようとしたらしいが、追い返されたんだときいきなり弓を引いて隠れてる場所の近くにズドンと」

「なんだそりや。偵察騎士ついたらあの嬢ちゃんだろ？」

「そうだよ」

「・・・そう。なら強いかもしれないわね、そのヒルチャール」

「だなあ。あの時、本気で隠れられたけど、見つけれなかったし」

我々が風の行方簡単に言えば大人の本気の隠れ鬼十鬼ごっこ。こちらの世界では街の一角を使っている。物の中に隠れたり、茂みに身を潜めたり。鬼が複数人だったりルールを色々と変えている。結構楽しそうという遊びをした際に、偵察騎士のアンバーさんと一度だけやったのだが、隠れている場所は最後まで見つからなかった。途中で移動までしていたらしいのに。

それを、すぐに見つけたのだ。弱いわけがない。

「そうだとしてもさ、他に情報はないのか？」

「普通のと比べると少し筋肉質で大きく、アンバーさんを見つけれられるくらい気配に敏感ってことくらいね」

「筋肉質ねー。でも、ヒルチャール暴徒って言われたりしてないから、普通のヒルチャー

ルより筋肉質で大きいけど、暴徒よりは小さくて細そいつてことね」

「普通のヒルチャールとほとんど変わんねえだろ」

「そんな事言つてたら足元揃われるぞ」

「はっ、近づかれる前に射抜いてやるよ！」

ザアザアと水の激しく流れる音が聞こえ始めた。

「全員、もう少しで目標の場所だ。警戒しろ」

モンドと璃月の間。高低差が激しく、隠れる場所の多い地形。そして目標の敵は気配に敏感なヒルチャール。

ああ、骨が折れそうだ。

【冒険者チームの構成】

弓持ちの後衛が2人

片手剣と小盾持ちが2人

大盾と戦メイヌとも言う棍持ちが1人

両手剣持ちが1人

槍持ちが2人（内1人はリーダー）

【勝利条件】

敵対者の全滅、および撃退

ググプラムを口に放り込み、種ごと噛み砕いて飲み込み、一息ついた。ついに来やがったか、冒険者。

崖の下で周囲を警戒し移動する奴らを見ながら、ため息をこぼし、風スライムに感謝の言葉を言つて撫で、空へと逃した。

偵察騎士アンバー。舐めていた？ んだろうな。わざわざ”偵察”が付いているのだ。隠密行動が得意なのだろうと思つていたが、あそこまでとは思つていなかった。

気配に気づけたのはここに戻つて来た時だけ。おそらくはそれ以外も見られていた。

見られていた事を知れたのは良かった。知らずに敵が来たら、対処すら出来なかつた
だろう。

「だが、少し準備をすることができた」
「得心せずに行進やれぬはずだ」

運良く戦闘を見ることもできたので見ていたが、原作キャラと比べれば大したことはない。宝盗団と良い勝負になるくらいの弱さだ。

それに、今回のことは他の人間に自分の力を示す良い機会になる。力があると手を出そうとする者も減る。そして危険ではあるが、力を持つ者と戦う事で自身の身を守る力

を得ることが出来る。

? 故に、彼らを倒す。殺す事はしないが、完勝する。慢心も無く、冷静に、彼らを打倒する。

混ざり混ざった鉱石で出来た黒い仮面に手を当て

「あ、開戦の音が」

小さくそう呟き、眼下の冒険者へと奇襲をかけた。

「なっぎあっ!!?」

「! 敵しゅづっ!」

弓を持つ冒険者を狙い一撃。そして背後を警戒していた者に素早く一撃。電気水晶を取り付けた棍棒は、打撃と共に強力な電気を放出し、敵の意識を刈り取ることが出来る。

倒れた2人から他の冒険者へと顔を向け駆け出そうとするも、状況を把握したりダーが槍を構えて走り込んでくる。

小さく舌打ちして後ろに跳び槍を避けていくと、向こうは倒れた仲間を担ぎ上げて逃げだした。

(判断が早い。何かあったら逃げるようにしているのか。それに)

逃がっている彼らは2人が交互にこちらを見てきている。他の奴らは前方、上方を確認しながら走る。ここらにもヒルチャールはいるため、その判断は間違っていないだろう。

(ちっ、上からの奇襲はもう使えない。なら?)

杭を取り出して投げつける。真っ直ぐに刃を前にして進む杭は、リーダーの男に刺さる直前、大盾を構えた男に防がれた。

舌打ちするもその盾に杭が上手く刺さっており、俺はそこに勢いを乗せて棍棒を振るう。

「ぐっ、ガアッ!」

盾を突き抜けた杭に電気が流れ、杭の先から放出された電流が相手の体を突き抜ける。痺れているのを確認することなく盾を飛び越え頭に踵を叩きつけた。

倒れた相手を軽く見て、リーダー格の男に眼を向けると槍が迫ってきており、それを見て下がる。

やはり槍というのは面倒だ。ただでさえ点の攻撃で防ぎづらいのに、リーチが長い。

「そいつを抱えて逃げろ! 早く!」

「っ、了解! 帰ったら一杯やろうぜ!」

「来れませんでしたーなんて言うんじゃねえぞ！」

「ああつ、頼んだ！」

リーダー以外が逃げていくが、下手に飛び込む事はできない。以前少し強^中い冒^堅険^目者と戦った時も、こんな感じだったな。

近づこうとするも槍により阻まれ、相手もこちらも攻撃が当たる事なく、ただ時間が過ぎていく。

素早く鋭い突きを躲し、近づくと暇なく2撃、3撃と突き込まれ、無理に棍棒で弾くが相手は無理することなく下がる。

杭を投げるも槍で弾かれ、その隙に近寄ろうとして石突で牽制され、槍の切り上げを避けるために後ろに下がる。

狭い道だから？ 違う。^{主人公達}アイツらなら問題なくやれる。
相手が槍で、こちらは棍^{短い武器}棒だから？ 違う。^{主人公達}アイツらならそれすらも無視して一気に

攻め落とせる。

弱^{技が無い}いんだよ俺は。

力が無い
弱い
度胸が無い
弱い
特別な力も無い
弱い

ならどうする？

力を付けようにも、今は無理だ。少しづつ付けていくしかない。

度胸など無理だ。死にたくないのだから。

特別な力に頼ることはできない。それが与えられることなど、期待できない。

——ヒルチャールが動きを止めた？

だが、技なら、そう、技なら見てきた。

現実での物、架空の物。色々と見てきた。

——視線が逸れた！　ここで決める！

「はあああああ!!!」

胸元へ迫る、攻防の中で見ることのなかった素早い突き。必殺の一撃。

それを見て頭に浮かんだのは、獣腕獣の忍の技だった

当たる直前に半身になると、槍は何も無い場所を通り過ぎた。そしてその槍を踏み地へ押し潰す。

「?あ?」

体勢が崩れた瞬間に一步後ろへ下がりが、ガラ空きの胴体へ棍棒を振るえば

「があつつつ…?」

忍 殺

静かに残心しながら倒れ伏す相手を見…息をしているが、動く様子のない状態になつているのを確認し、齒を噛み締める。

他世界の技を使わなければ、もつと時間がかかつていた。杭がたまたま刺さつただけで、あの盾持ちを倒せたのは実力ではなく運だ。

バキンと齒が欠け、力を抜いて倒れた冒険者を見た

「???あ、
運がつかないか」

そうして冒険者を肩に担ぎ、槍を手にして歩き出した。アカツキワイナリー。その近くに置いていこう。

VSデイルック

アカツキワイナリー。原神の世界において、酒造業を営むデイルックが拠点とする場所。一面に広がるぶどう畑と、それに囲まれたデイルックの屋敷兼ワイナリー。

ぶどうを育てるのは涼しい場所がいいと聞いたことはあるが、なるほど、ドラゴンスパインから冷涼とした風が吹き、風晶蝶が発生するほどには風通しと元素濃度が高い。・・・まあそれでスライムの発生頻度が高いのだが。そこは大変そうである。

背負った冒険者を適当な場所に降ろし、先ほどから感じる気配へと視線を向けた。陽炎、燃え盛る気配。これだけで分かる。

デイルックだ

体をのけぞらせると頭のあつた位置に炎が燃え盛った。こういつたことは苦手なんじゃなかったのかなあ両手剣使、お前は！

後ろに跳ぼうとして無理やり横に方向を変えた。跳ぼうとした場所に火柱。容赦がない。そして腰の棍棒を両手で掴んで体を捻り、視界端から振り下ろされる大剣へと打

ちかます

爆炎

いしきがきえ

すぐにもどつたしかいには こちらをみおろすかけ

炎が付いていた事をしつかりと見れていなかった。こちらが使っている武器が雷元素が付いていた。それらが原因だろう

そして、そのたった2つ、2つものミスで今、この瞬間に自分の命は尽きる。運命はここで終わり

少しは耐えれた

それで良いじゃないか

殺されるまで1人も殺さずにいけたじゃないか
もう十分だ。頑張死にたくないった

頑張死にたくないったんだ。もう休もう

ああ、もう2月も頑張った。耐えに耐えた。殺されそうになりながら、それでも殺さないように手加減できた。本気でやって数人の冒険者を同時に倒せた。

そりゃあ原作キャラであるデイルックには負けたさ。強くて、先を読んできて、最後の元素反応すら痛手になっていなくて。だからもう良いじゃないか。

寝よう死にたくない

俺の物語はここで終わり死

全部全部夢のようだった死

だからさ死にたくない

「死にたくない」

なんで生きようとするんだよ。終わろうよ。楽になろうよ。全部夢なんだって、ここで目覚めて「原神の世界でヒルチャールになってこんな事してただぜ」ってしようもなし事をSNSで呟いてさ。笑い話で終わろうよ死にたくない

「死にたくない」

怖いかな怖くないかで言ったら怖いさ。怖くて、泣きそうで、叫び出しそう。終わるかもしれないって。でも勝てないんだよ。勝てるわけないんだよ。

ああ、けど、やっぱ

「死にたくない」

剣を挿んで投げつけ、大剣で目を庇った瞬間に体当たりでよろめかせ、片足を軸にして

大剣に回し蹴りをして後ろへさげさせる。

けれど、その目はこちらを向いている。更に激しい炎の気配を撒き散らしながら。デイルツクの中にある炎が、大剣へと収束し、理解した。これが魔力元素か外に出さなくても操れるんだな魔力つて

神の目とは魔力器官であり、そのフィルターを通すことで元素を操る。

邪眼はそれに酷似しているが、生命力なども吸い取って力として発現させる。

ファデュイは元素を制御できる武器がある。

これらに関連するのは魔力を操るとは書いていないことだ。そもそも、魔力元素を視るには神の目の元素視覚を使わなければならない。

なら、神の目それを持っていないのに感じ取れ、視ることのできるようになった自分は？

力を操る方法を知っている自分は？
チヤクラなど

そうだ。自分なら出来る

「吸ちゅうせろ
！」

「火炎よ」

イメージが重要だ。力は感じ取れている。言葉に出すことで棍棒を強く意識し、丹田から血管を通り、棍棒へと一直線に魔力を向かわせる

心臓が激しく動く。心臓にて生成される生命力を魔力と混ぜ、増幅させる

棍棒に集まった魔力の形をハイマの大槌のような爆発するものに、変える

走っていた勢いを利用して振り返りながら

「偽・ハイマの大槌」

「燃やし尽くせ?!」

叩きつけた

爆炎が舞う

川を挟んだ崖の上。鷹のような目がこちらを見るも、すぐに視線を切つて冒険者の方へ歩いて行った。

足から力が抜けて、膝をつく。背中では燃えるように熱く、歯を噛み締めていなければ叫び出してしまいそうだった。

あの瞬間、咄嗟に背中を向けて正解だった。棍棒を地面に叩きつけた衝撃で黎明を霧

散させることには成功したが、熱はそのまま通り抜け、向けていた背中を爛れさせた。

もし、そのまま受けていたら、喉や肺が焼けたり、仮面ごと顔を焼かれていたかも知れない。

そして、それでも痛いものは痛い

ゆっくりと歩き、拠点としていいる場所に着いて、水面に倒れる。一瞬の冷たさが過ぎ、ジクジクとした痛みが脳を貫き、痛みを塗りつぶすように冷たさがまた来る。しばらくそうすると痛みが消えて、何も感じなくなつた。

痛みが消えたおかげで、ようやく、考える時間ができた

冒険者は弱かつた。実践経験もある程度あつただろうが、軍のような統率もなく、仲間が倒れて動揺していたのもあり、簡単に方がついた。

だがデイルツクは、強過ぎた。大剣は重く、もし雷元素が、火元素が付いていなかったとしても横に流せたとは思えない。つまり、あれは運が良かったのかも知れない。

最後までそうだった。

こちらを見るだけで終わってくれたが、もし追いかけていければ、逃げきれずに死んでいたかもしれない。

弱すぎる。誰がって、俺がだ。

暴徒より筋力は弱く、シャーマンのように遠距離攻撃は出来ないし、王のように体に魔力を纏う事はできない。実践経験もあるにはあるが、それだつてデイルックなどに勝つ事はできない。

もつと、もつと強くないと

右手に掴み続けていた棍棒の柄が崩れる。

まずは武器だ。金属をもつと使うか？ 精錬して炭素を混ぜて、強度を高めるか？

そこまで考えて、ドラゴンスパインの冷風が体を撫でる

牙を使うか

間話2

無傷ではないが生還した冒険者たちが酒場へ向かった後。冒険者協会からの依頼により、一月ほどで十数名ほどがヒルチャールに挑むも返り討ちに合い、その噂は広がった。モンドと璃月で。

そもそのヒルチャール、黒面のいる場所が璃月とモンドを繋ぐ道の近くにあるため、璃月からもモンドからも冒険者が集まりそしてやられていく。

二月もすれば噂は冒険者から街の住民へ、そして不安を感じた住民から街のトップへと広まっていった。

「申し訳ない、ジン代理団長殿。今モンドにいる冒険者だけでは太刀打ちの仕様がありません」

西風騎士団の執務室内、ジンに向かって頭を下げていたのはサイリユスだった。

冒険者のチームが撃退されて以降、神の目を持つてはいないが、それでも優秀な者達を送り続けた。だが、あのヒルチャールを殺すことのできたものはおらず、噂も広まりつつあった。

そうして、これ以上は手に負えなくなったため、西風騎士団に事情を説明しにいったという事である。

「黒い仮面を被ったヒルチャール、か。以前から報告されていた妙に強いヒルチャールと似ているな」

棍棒による受け流し、弾き、蹴り、投げ。意表を突く攻撃も。以前より上がっていた報告と酷似していて。

「負傷者はあれど、死者はいない」

ここまで強いなら死者が出るはずなのに出ておらず、更に被害に遭っているのは冒険者や攻撃を仕掛けた側ばかり。あとは、縄張りと思われる、モンドと璃月の間のみと限定されている。

このような偶然はあり得るのか？

いや、偶然と言うよりこのヒルチャールは死人を出さないように徹底している？

そして、自分の住む場所に近づいた異物に攻撃して追い払う。まるで、人のような

「いや、考えすぎだな」

首を振り、筆を取る。

そこにもう迷いは無く、書き終えたそれをガイアに渡す。

「すまないがすぐに届けてくれ」

「ああ、わかった。そろそろ休憩しろよ？ 働き詰めだとまたリサから叱られるぞ」

それに軽く返事し、ジンはまた職務に取り掛かった。

その後、璃月

「へえ、黒色の仮面をつけたヒルチャールねえ。話は聞いていたけど、まだ倒されていないなんて。貴女達はどう思う？」

「？ヒルチャール・レンジャーと呼ばれる種がスマールにいたはずよ。それがたまたまここにやってきたか、その近縁種が偶然発生したか。そのどちらかでしょう」

「私も同じです。でも、少し強すぎるような気がします。確かにヒルチャール・レンジャーは通常より強いとはいえ、ここまで倒されることがないとなると、異常ではないかと」

凝光は少しの間噂による行商などの影響を考え、決断した。

「モンドとの話を受けましょう。刻晴は部隊の編成を。早くて来月からだから準備し

て」

さらさらと筆を走らせ、出来たものを蠟で封をし、甘雨に渡す。

「甘雨はこれを。部隊の編成が終わったら順次此方へと来ていただきましょう。こんな事はそうない事。だから合同訓練や動きを擦り合わせて、急造でも連携が取れるようにする必要があるわ」

甘雨は分かりましたと言い、待たせているモンドの使いの下へ歩いていった。

外の動きが怪しいからと警戒しているところにこれである。少し目の色ハイライトが消えかかった凝光であった

モンドのとあるホテル

『 『さん。』 『さん！』

「んうう、なによお？」

「執行官様から任務を預かってきました。1人で気付かれないようにとのことです」
「不安要素であるヒルチャールの討伐、ねえ。ふうん??」

音が聞こえる

轟々という音が耳を打ち、風が体の横を通り過ぎる
いや、風を突っ切って飛ぶ

翼を羽ばたかせ、空を飛び回る

下から声がして、そちらを向く

こちらへと声をかけながら手を振る人
呼ばれていると思いきちらへと近づき、ゆっくりと着地する
顔を近づければ、人はその小さな手で私の頬を撫でて
笑った

音がする

轟々という音が耳へ入り、多くの悲鳴が聞こえる

山に出来た建物が炎に包まれ、雷が落ち、空から釘が落ちる

天からの光が目を焼く

人が発狂し別の何かへと変わる

理性を失った彼らはどこかへと行った

母は私を残し去っていった

・
・
・

・
・
・

ああ、
ニクイ